発達のなかの煌（きら）めき

第Ⅱ部 発達的共感が創り出す実践
―歴史に学び、今をみつめ、未来を創る

白石正久　白石恵理子

しらいし　まさひさ／1957年、群馬県生まれ。小児科病院の発達相談員などを経て、現在龍谷大学名誉教授。

しらいし　えりこ／1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。

第9回　地域のなかではぐくまれるもの

「地域ってことの意味」

あるお母さんのお話。幼児期から、息子さんの育ちをともに見守ってきました。

わが子ながらオモロイなぁ。作業所に通う電車、いつも一番後ろに乗ってるんやけど、車掌さんと「指さし確認」するためやがな。K電車、じょうずに相手してくれはるわ。駅からの帰りがケッサクや。後ろについてみたねん。近所のおじさん、おばさん、夕涼みで家の前に出てはるけど、みんな「お帰り」って声かけてくれる。うちの子、ウンともスンとも言わんのになぁ。いつ、こんな関係になったんや。ケッサクはトマト、オクラ。前金払ってんのに、ちっとも持ち帰らへん。職員さんに文句言うところやったわ。おじさん、おばさんに分けてるねん。畑しごと頑張ってるし、「ありがとう」って言ってもらうのがうれしいんやろなぁ。「地域ってことの意味」がわかったような気がする。通園施設に通ってたときの散歩、文句言ったことあるわ。歩いてるだけでは何にも身につかんやろって。でも、地域の人、いつも見ててくれたんやなぁ。子どもも、ただ歩いてたわけやないんや。

連載の解説版「もう一つの『発達のなかの煌めき』」は、こちらから見ることができます。
最新の第16回を公開中！

「高田の保育」

第Ⅱ部第六回（九月号）から、宮沢賢治の「本当のさいわい」という言葉に導かれて、自然との交感、文化の創造、労働と分ちあいが生みだす幸福感と発達についてお話ししてきました。今回は、少し視野を広げてみます。保育実践のなかに、これらのテーマのつながりをみつけました。それは「高田の保育」です。

人びとの生存を支えるしくみを探究してきた大門正克さんは、岩手県陸前高田市で保育所長をしていた佐々木利恵子さんの語りと保育資料によって、東日本大震災を経てもつながりつづけた「高田の保育」について考察しています。今回は、この大門さんの研究（参考文献参照）から引用しつつ学びます。

津波が迫ってきたとき、保育士が乳児をおんぶし、幼児の手を引いて崖をよじ登り、地域の人びとが助け上げてくれて、全員を守ることができました。山道を歩いて、やっと避難場所にたどり着き、最後の子どもを家族に手渡すことができたのは一〇日目でした。

震災から五日目に、津波で流されてしまった保育所の太鼓が見つかりました。避難先に届けられたとき、まだ太鼓を習っていない年中児が、見事に叩いてみせました。年長児の練習に目を凝らし、お囃子（はやし）を耳に残して、自分たちも「いつかきっと」と憧れていたのでしょう。その姿を見て、心に光がさし込んできたと佐々木さんは語っています。そして、避難先に身を寄せての運動会で、子どもたちが太鼓を披露し、地域の人たちの笑顔、拍手、涙へとつながります。佐々木さんが所長をしていた保育所のあった今泉地区には、山車（だし）をぶつけあう「けんか七夕」（県の無形民俗文化財）があり、保育所の子どもはお囃子の太鼓を叩きます。毎年三月に「太鼓の引き継ぎ式」を行ない、年長児から年中児へとバチが手渡され、地域の保存会の人たちから太鼓を習うことになっていました。

節分には、近くの山に住む鬼から、「子どもをさらってしまうぞ」と手紙が届きます。年長児は自分たちで作戦を練って鬼と対決し、小さい子どもを守る大切な役割があります。震災の後、怖い鬼に出会わせてよいものかというためらいが保育士にはありました。しかし夏ごろから子どもたちは、鬼を迎え撃つ作戦を話しあいはじめていたのです。「鬼は、プレゼントをもらったことがないんじゃないか。プレゼント作戦で山に帰ってもらおう」。でも、プレゼントの渡し役がなかなか決まりません。けっきょく泣きながら渡した手紙やプレゼントを鬼はうれしそうに受けとって、「もう泣くなよ」と言い残して帰って行きました。年長児にとって、小さい子を守れるということは大きくなった証（あかし）であり、その任務を全うしたかったのです。

「高田の保育」と呼ばれるようになるまでには、変化の契機がありました。一九九〇年代初頭、保育所統廃合、保育士削減などを掲げた「行政改革」に対して、「保育をよりよくする会」が結成されました。職員配置の不十分さなどさまざまな課題をありのまま伝えて、地域で懇談会などを重ね、市民みんなが保育のことを考え、その充実をねがうようになっていったのです。さらに、保育士が保育の全国集会などに参加することによって、「統率的」に子どもを動かすしかなかった保育を捉え直し、子どもに「問いかけ」、その発想や「話しあい」を大切にする保育を創っていきました。

この運動による職員配置、労働条件の改善などによって、ていねいに子どもの